山陽鉄道総支配人就任までの牛場卓蔵の足跡

井　田　泰　人

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　牛場卓蔵についての資料
Ⅲ　出生から明治20年頃までの活動
Ⅳ　民間企業での活動
Ⅴ　衆議院議員選挙の立候補と政治活動
Ⅵ　おわりに

Ⅰ　はじめに

筆者はこれまで山陽鉄道の経営者についての研究を進めてきた。初代社長の中上川彦次郎，副社長のまま最高責任者となった村野山人，2代目社長の松本重太郎については，「山陽鉄道会社における中上川彦次郎の経営姿勢と社内改革」（交通史研究会編『交通史研究』第39号，1997年，56-69ページ），「村野山人と山陽鉄道」（交通史研究会編『交通史研究』第48号，2002年，57-68ページ），「松本重太郎の企業家活動と山陽鉄道の経営」（近畿大学短期大学部編『近畿大学短大論集』第46巻第1号，1-13ページ）を発表している。それぞれの経営方針と活動に注目して山陽鉄道に及ぼした影響という点から評価を行ってきた。自身の研究計画における，最後の作業として，同社4人目のトップマネジメントである牛場卓蔵の経営手腕について検証することが残っている。これを済ませることによって「明治期における私設鉄道の発展と経営者の役割」というテーマのなかで山陽鉄道の事例研究が完結すると考えている。

これまでの作業で幾つか気付いたことがある。その一つに，経営者の就任期間中の動向に注目するだけでなく，経営の任に就くまでの足跡を探ることも重要であると感じるようになった。特に人脈，人間関係が経営に大きく影響を与えることを確認し，これらを見ていくことの必要性を強く感じた。

山陽鉄道の経営者である牛場卓蔵についての先行研究には，西藤二郎「山陽鉄道における牛場卓蔵の役割」（近畿大学経済学会『生駒経済論叢』第7巻第1号，2009年，163-188ページ）がある。同論考は，牛場の経営方針と活動をテーマにしたもので，初代社長の中上川彦次郎の経営方針を継承し，山陽鉄道の発展に寄与したという論旨である。牛場の山陽鉄道入社にいたるまでの経歴についても記されているが，依拠した資料を見直すべきであり，その上で前述の作業を進める必要があろう。

福沢諭吉の甥で，慶應出身者の中上川彦次郎は山陽鉄道で経営方針をめぐって関西の経営者・株主と衝突し，3 年半で社長を辞した。牛場は 1894 年に総支配人に就き，1904 年から専務取締役に就任して，国有化が実現するまで同社経営の指揮を執った。牛場は，他の経営者・株主と衝突したということは特になかった。同じ慶應出身ではあるが，何故，中上川は早期に退陣し，牛場は長期的に経営にあたれたのかという疑問がおこる。これについては，西藤の論考の終章でも指摘されている。また，筆者は長船友則『山陽鉄道物語』（JTB パブリック，2008 年）の書評を発表したが，そのなかで松本が社長に就任する 1892 年以降の経営者の動向についての記述が弱いという主旨の指摘をした[1]。それに対して著者の長船は「当時の新聞記事には出てこなくなった」と述べた[2]。筆者も新聞記事を調べており，確かにその通りで中上川社長退陣後，その様子，特に社内の混乱についての記事は見られなくなった。報道にならないということは，経営者および株主間で大きな問題も起こらず，同社の人間関係が安定した時期に入ったといえる。

そこで，本稿では，先ず，筆者が収集した牛場卓蔵についての資料の紹介およびそれらの史料批判を行っていく。次いで適否を判断しながら牛場卓蔵の山陽鉄道入社までの半生を明らかにし，人間関係の点から同社で「長期政権」を確立できた要因を考え，提示することとしたい。

Ⅱ　牛場卓蔵についての資料

1　戦前の文献

牛場卓蔵について，単独で取り上げた自伝・伝記・評伝は，これまで刊行されていないようである。それに代わる牛場の生涯を知ることのできる文献・資料について以下で見ていきたい。

「伊勢新聞」では，三重県下の衆議院選挙立候補者を紹介することがあった。1892 年 2 月 21 日付に，第 2 回衆議院議員選挙で当選した牛場卓蔵の経歴が掲載された。資料としては，牛場の現役で活躍していた時期に最も近いものとなるが，1892 年頃までの様子しかわからないという短所がある。三田商業研究会編『慶應義塾出身名流列伝』（実業之世界社，1909 年，481-482 ページ）という慶應義塾出身者の著名人の略歴をまとめた文献があり，ここに牛場卓蔵も取り上げられている。他には人事興信所編『人事興信録　第 3 版』（人事興信所，1911 年，う 67）がある。対象となる人物の生年月日，職業・公職，簡単な経歴などが記載され，それ以外にも配偶者，実子，養子など親族に

1　拙稿「書評　長船友則『山陽鉄道物語』」『鉄道史学』第 27 号，2010 年，37-39 ページ。
2　2015 年度に開催された鉄道史学会第 33 回大会時の懇親会の席上で長船友則氏と筆者が対話した時のコメント。

ついての情報が掲載されている。以上が明治期に刊行された文献である。死去して何年も経過してからまとめるというものでなく，現役時代に近いという意味では，当時の様子を正確に記していると捉えることもできる。

次に大正期もしくは昭和初期に刊行された文献を見ていこう。野依秀市『財界物故傑物伝』（実業之世界社，1936 年，202-205 ページ）があり，同書はよく利用されるポピュラーな文献である。しかし，年数，業績などに誤りが見られ，慎重に扱う必要がある。特に本稿での内容と関わる，牛場の山陽鉄道の入社時期については，日本土木会社の創立と同時期とされ，間違いが確認される。なお同書は 1998 年にゆまに書房から復刻されている。

さらに日本現今人名辞典発行所編『日本現今人名辞典』（日本現今人名辞典発行所，1900 年，うノ 22），成瀬麟・土屋周太郎編『大日本人物誌』（八紘社，1913 年，32-33 ページ）においても「牛場卓蔵」（前者ではうノ 22，後者では 33 ページ）が載せられている。

その他，郷土の偉人の経歴がまとめられた文献には，服部英雄『三重県紳士録』（三重県紳士録編纂会，1915 年，570-571 ページ），浅野儀史『続三重県先賢伝』（別所書店，1933 年，43-44 ページ）があり，ここでも牛場についての記述が確認できる。

2　戦後刊行の文献

戦後の文献には，ハル・松方・ライシャアワー，弘中和歌子訳『絹と武士』（文藝春秋，1987 年）がある。松方ハルの自身の生涯をまとめたものであるが，同書では，松方家と関係の深い松本重太郎，新井領一郎，そして牛場についての親類でしか知らない情報が読み取れる点で有益な資料といえる。しかし，一方で牛場の出生年を「1848 年」（268 ページ）と書き[3]，新聞の紙名については，「郵便報知」であるところを「夕刊報知」（269 ページ）と記し[4]，誤りや記憶違いと思われる記述が見られる。

辞典および事典については，神戸新聞出版センター編『兵庫県大百科事典』上巻（神戸新聞出版センター，1983 年）に「牛場卓蔵」（293 ページ）の項目がある。神木哲男が執筆にあたっている。牛場の山陽鉄道への入社時期が中上川と同時と記しているが，これは誤りである。鉄道史に関するものとしては，日本交通協会編『鉄道先人録』（日本停車場㈱出版事業部，1972 年，57-58 ページ）がある。鉄道業界の重要人物を取り上げ，略歴をまとめた便利な文献であるが，出典が明記されていないことが欠点といえる。国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第 2 巻（吉川弘文館，1980 年，84 ページ）

3　出生年を 1848 年とする文献は他に見当たらなかった。
4　同社の社史，報知新聞社・社史刊行委員会編『世紀を超えて－報知新聞 120 年史』（報知新聞社，1993 年）では「夕刊報知」の紙名，社名は確認できなかった。

を見ると，原田勝正が牛場卓蔵の経歴をまとめている。参考文献には『財界物故傑物伝』上巻が挙げられている。2000年以降のものでは，鉄道史学会編『鉄道史人物事典』（日本経済評論社，2013年）がある。「牛場卓蔵」（68-69ページ）の記述は老川慶喜の執筆によるものである。参考文献に『慶應義塾出身名流列伝』を挙げているが，同書に出ていない「実父」を示している。実父を「原平一郎」としていることから『財界物故傑物伝』の内容も含まれている。また，原田，老川は山陽鉄道の入社後の事績を挙げており，ともに牛場卓蔵が「私設鉄道利益配当制限論」を唱えたことを紹介している。

これまでの牛場卓蔵の略歴を修正する動きも出てきた。上野利三「慶應義塾出身牛場卓蔵の第二回総選挙・三重県第一区における選挙戦：日本初期選挙史の研究（7）」（慶應義塾大学法学部『慶應の政治学　日本政治：慶應義塾創立150年記念法学部論文集』2008年，25-55ページ）の巻末に付された「当選者牛場卓蔵の略伝」がそれである。前述の「伊勢新聞」，『慶應義塾出身名流列伝』，『財界物故傑物伝』，『国史大辞典』の記述を照合，正誤確認しながら，これまでの牛場の「生涯」を修正している。

その他，郷土史を研究する岡田文雄は『藤堂高虎の分家社会を知る辞典『知られざる久居藩政史』改訂・増補』（タイムトンネル刊行部，2005年）を発行している。戦国武将・大名である藤堂高虎の「分家」に仕えていた人物を追跡した書籍である。同書で明治以降の三重県の政治史を記す中で牛場が紹介されている。特に不明な点の多い幼少期についての記述が見られ，参考になる。ただ，時期について疑問が残る点もある。鈴木正幸・布川清司・藤井譲治『兵庫県の教育史』（思文閣出版，1994年，219-227ページ）では，慶應卒業後，兵庫県勧業課で務めた時に教育部門に関わった様子が詳細に記述されており，同書からも牛場の経歴で手薄な部分を埋めるだけの有益な情報を得られる。

以上，紹介してきた文献である程度，牛場の生涯についてイメージはできるが，記述に誤りや疑わしいと思われる部分，内容の濃淡，重要事項の遺失が見られ，完全なものではない。一方で相互に補完できる要素も確認できた。有効な記述をもとに，以下で牛場の半生を見ていくことにする。

Ⅲ　出生から明治20年頃までの活動

1　慶應義塾卒業までの様子

牛場卓蔵の出生時期については諸説あるが，1850（嘉永3）年12月28日といわれる[5]

5　人事興信所編『人事興信録　3版』人事興信所，1911年，う67。出生年については，本文中に記したとおり，ハル・松方・ライシャワー『絹と武士』（文藝春秋，1993年）では「1848年」（268ページ）とし，鉄道史学会編『鉄道史人物事典』（日本経済評論社，2013年）の「牛場卓蔵」（68-69ページ）では「1851年」としている。その他，誕生した「日」については「伊勢新聞」1892年2月21日付に掲載された「牛場卓蔵氏小伝」において「18日」と記されてる。岡田文雄『藤堂高虎の分家社会を知る　↗

現在の津市の一部である安濃郡安東村渋見の井早平十郎の子として生まれた[6]。実父の井早平十郎については，『明治初期戸長役場資料』によると，「第八大区三之小区　安濃郡塔世村　中河原村　乙部村　戸長」に就いていた[7]。1869（明治2）年，一志郡森村の「豪農」で，「里長」を務めた牛場圭次郎の養子となった[8]。牛場圭次郎は，1870年の久居藩の区制を示した「信藤家文書」によると，森，石橋，其倉，庄田を区域とする第10区の戸長であったことが記されている[9]。

青年時代の牛場については，学問を好み，久居義塾に入塾した。もともと久居には藩校があったが，1871年8月15日に学制改革が行われて廃止されている。新たに設置された郷学校が久居義塾であった。開学後，同塾では文学，筆学，算学の授業が行われていた。同塾の運営は資金，財政面で苦しかったといわれる。そうしたなかで1872年3月17日に，同塾副長の佐野嘉衛の引率で15日間，京都・神戸方面に研究旅行にでることになった。その時のメンバーに牛場が含まれていた[10]。一行は京都博物館，神戸港を直接見て感銘を受けたといわれる。牛場は同年4月に同塾の助教授に任命されるが，これを固辞し，退寮した[11]。5月13日，牛場は四日市にある泗水塾に遊学している[12]。おそらく，神戸や京都で見た「文明開化」に刺激を受けたことで，「洋学校」として開校した泗水塾に「洋学」や「英語」を学ぼうとしたものと思われる[13]。

その後，上京して慶應義塾に入る。その時期は修業期間を考えると1872年頃であったと思われる[14]。陸奥宗光のもとで下宿し，義塾に通ったと伝えられている[15]。その時の年齢は20歳を超えており，「普通の学生より年はとっていた」が，遅い入学にもかかわらず，「論客」として評判となった。尾崎行雄，犬養毅，牛場は三田の「三勇士」として

↘　辞典『知られざる　久居藩政史』改訂・増補』（タイムトンネル刊行部，2005年）では「8日」としている。出生時期が資料・文献によって異なる。

6　「伊勢新聞」1892年2月21日付。なお，身分や家格については，ハル・松方・ライシャワー，同書，266ページには，牛場卓蔵が「伊勢、津の外様大名に仕える下級武士の家庭に生まれた」とあり，士族の記述が人物辞典等でも散見される。しかし，人事興信所編，前掲書では「平民」となっている。また，「同紙」1890年4月12日付では，三重県下の直接税多額納税者に「安東村　井早平十郎」の名が挙がっており，地方の名望家であった思われる。下級武士からの成功は考えにくく，士農の区分については「農」でとらえる方が妥当かと思われる。

7　三重県郷土資料刊行会編『明治初期戸長役場資料』三重県郷土資料刊行会，1982年，238ページ。

8　「伊勢新聞」1892年2月21日付。

9　岡田文雄編『久居市史』下巻，久居市役所総務課，1972年，43-44ページ。

10　三重県総合教育センター編『三重県教育史』第1巻，三重県教育委員会，1980年，276-282ページ。

11　岡田文雄『藤堂高虎の分家社会を知る辞典『知られざる久居藩政史』改訂・増補』タイムトンネル刊行部，2005年，299ページ。

12　三重県総合教育センター編，前掲書，282ページ。

13　泗水塾については，西田善男『明治初期における三重県の外国学校』三重県郷土資料刊行会，1972年，124-148ページ），三重県総合教育センター編，前掲書，265-271ページ，四日市市編『四日市市史』第18巻通史編近代，四日市市，2000年，169-171ページを参照されたし。

14　1871年と記されているものには，成瀬麟・土屋周太郎編『大日本人物誌』（八紘社，1913年，32ページ），浅野儀史『続三重先賢伝』（別所書店，1933年，43ページ）がある。

15　野依秀市『財界物故傑物伝』実業之世界社，1936年，202ページ。

挙げられるほどあった[16]。卒業は1874年4月であり[17]，しばらく東京に残ったようである。

2　言論界での活躍と官吏時代の功績

卒業後，内務省に出仕したと記す文献があるが[18]，これについては確認できない。現存最古の内務省の職員録を見ると，牛場の名前は確認できない[19]。かりに卒業後内務省に出仕したとしても，その期間は短期間であったといえる。

確実なところとしては，牛場は「郵便報知新聞」で務めることになる。同紙は現在の報知新聞にあたるが，今のような新聞ではなかった。駅逓頭であった前島密が創設にかかわり，1872年6月10日，第1号を発刊しており，翌年から日刊紙に切り替えている[20]。同紙の政治的立場は「民権論」をとった[21]。当時，編集責任者であった栗本鋤雲が福沢諭吉に助けを求め，福沢がそれに応える形で門下生の箕浦勝人，藤田茂吉，牛場らを推薦したという。牛場は1874年6月に，同紙に論文を発表し，好評を博した。翌年3月に藤田，箕浦，牛場が正式に入社した[22]。また，私的な事としては，1876年1月に家督を継いでいる[23]。

牛場は1877年1月に兵庫県の勧業課長に就いた[24]。管内の勧業に努めた。具体的な取り組みとして牛場は勧業に関する広報冊子の発行計画を立て，遅れて兵庫県庁に赴任した，慶應の後輩である本山彦一とともに蚕業，綿作，その他農事の情報を提供した。同冊子は管内の農家に広く読まれる定期刊行物『兵庫県勧業報告』となった[25]。同じ年，または翌年に，牛場は学務課長も兼任した[26]。この時の活動で特筆すべき事は，当時兵庫県県令の森岡昌純から商業学校の設置を命ぜられ，その任務を全うしたことであろう。こ

16　ハル・松方・ライシャワー，前掲書，269ページ。
17　「卒業名簿」『福澤関係文書』（雄松堂書店マイクロフィルム）。
18　例えば，日本現今人名辞典発行所編『日本現今人名辞典』（日本現今人名辞典発行所，1900年）うノ22，野依秀市，前掲書，202ページなどではそう記している。
19　内務省の『官員録』が国立国会図書館に所蔵されている。1874年以降のものである。それらを見たが，牛場卓蔵の名前は確認できない。
20　報知新聞社・社史刊行委員会編『世紀を超えて－報知新聞120年史』報知新聞，1993年，139-141ページ。
21　同書，144-145ページ。
22　同書，400-401ページ。
23　人事興信所編，前掲書，う67。
24　鈴木正幸・布川清司・藤井譲治『兵庫県の教育史』思文閣出版，1994年，225ページ。
25　故本山社長伝記編纂委員会編『松陰本山彦一翁』大阪毎日新聞社，1937年，91-92ページ。
26　鈴木・布川・藤井，前掲書，225ページ，226ページ。慶応義塾編『慶応義塾百年史　付録』慶応義塾，1969年，179ページ。「明治二十三年以前における慶応義塾出身教職員の分布状況」には「明治10年」に「兵庫県学務課」と記録されている。また，「学務課」の設置時期および前後の教育界の動向については，兵庫県教育史編集委員会編『兵庫県教育史』（兵庫県教育委員会，1963年）に「明治一二年の教育令は，教育の主管が各地方庁にあることを明示するものであった。兵庫県おいても，学務専任の係りを置くようになった（明治－引用者）八年以降，県に第五課ないしは学務課がおかれている。そして十二年の教育令によって県令は郡長を通じて全県の教育行政を行うこととなった」（217ページ）と記されている。兵庫県に学務課のできた時期に牛場が入ったようである。

の件について牛場は福沢諭吉にも相談したようで，県と慶應義塾との間で商業学校の設置を引き受けることになり，約束書を交わした。牛場は福沢推薦の甲斐織衛を校長に据え，その設立に尽力した[27]。牛場は同職を退く際，学務課の後任に本山彦一を推薦しており，本山が引き継いだ[28]。

1880 年 2 月，大隈重信は国会開設，政党内閣樹立を目指し，それに協力する人材を探していた。関りの深い矢野文雄に犬養毅，牛場卓蔵を官途に就けるように話をしていた[29]。牛場は地方から国の官吏へと移ることになるが，同年 4 月 5 日，会計部御用掛准奏任として採用される。同職の月給は 90 円であった[30]。翌年 6 月 21 日には統計院少書記官に任命されている[31]。牛場は大隈重信が大蔵大臣の時に，その下で活動していた。いわゆる「明治十四年の政変」で薩長藩閥によって大隈重信が失脚すると，大隈支持の慶應出身者の官吏が一斉に辞めていった[32]。牛場も同職を辞した[33]のである。

政変後，主な慶應出身者の動向について見ておくと，矢野文雄，犬養毅，尾崎行雄は改進党の結成とともに大隈幕下に加わった。中上川彦次郎，牛場卓蔵，森下岩楠，津田純一の 4 人は「時事新報」の発行に参画した[34]。そして，牛場卓蔵は朝鮮政府の「顧問」として派遣されている。朝鮮国から使節が来日し，1882 年 12 月下旬，その使節が帰国の時に牛場卓蔵らも朝鮮にわたった。この役目については先に福沢諭吉に話があったが，承諾しなかったようである[35]。しかし，現地で体制が変わり，牛場たちは反対運動に合い帰国することになった。この任務については不徹底に終わった[36]。

その後，1884 年 2 月 22 日付で大蔵省准奏任御用掛に就き，官吏に復帰している。就任時の月給は 100 円であった[37]。牛場卓蔵は 1887 年 6 月に大蔵省を辞した[38]。明治 20 年頃，福沢諭吉が門弟に対して「官尊民卑」の弊害を唱えるようになり，慶應出身者が進

27　鈴木・布川・藤井，同書，219 ページ。

28　同書，232 ページ，故本山社長伝記編纂委員会編，前掲書，90 ページ。

29　報知新聞社・社史刊行委員会編，前掲書，p.155。同書では，大隈の意向で牛場は郵便報知を退社することとなったと記されているが，兵庫県勧業課長に就く時期と重なり，1880 年まで同社に籍を置いてかは疑問が残る。

30　「牛場卓造御用掛被命会計部勤務ノ件」太政官・内閣関係，第 1 類公文録，明治 13 年，第 116 巻，官吏進退，太政官・雑・御巡幸御用掛。

31　「東京日日新聞」1881 年 6 月 22 日付。

32　尾崎行雄『咢堂自伝』（咢堂自伝刊行会，1937 年）には「大隈さんは薩長連合軍の総攻撃を受けて，三田出身の役人は云ふに及ばず，苟くも大隈派と目せられたものは，悉く辞職すべく余儀なくされ，矢野（文雄－引用者）君はじめ吾々一同も，辞職した」（57-58 ページ）と記している。伊佐秀雄『尾崎行雄伝』（尾崎行雄伝刊行会，1951 年，100-103 ページ）も参照されたし。

33　伊佐，同書，102 ページ。

34　慶應義塾編，前掲書，793 ページ。

35　「大阪朝日新聞」1882 年 12 月 27 日付。

36　石河幹明『福澤諭吉』岩波書店，1956 年，317-344 ページ。

37　「三重県平民牛場卓造御用掛被命ノ件」太政官・内閣関係，第一類公文録，明治 17 年。25 日に同職で「租税局」での勤務を命ぜられた（「大阪朝日新聞」1881 年 3 月 1 日付）。

38　「大蔵省主税官牛場卓造依願本管罷免」太政官・内閣関係，第 5 類諸官進退・官吏進退，明治 20 年官吏進退 4，大蔵省。

んで官を辞した[39]。牛場もそれに合わせたようである。

Ⅳ　民間企業での活動

1　日本土木会社への入社

牛場は活動の場を「民間」に移した。1887年7月，日本土木会社に入社することになった[40]。日本土木会社は渋沢栄一，大倉喜八郎，藤田伝三郎らの共同事業で，資本金は200万円で発足したのであった。同年4月17日，組織，役員も固まり，正式に活動を始めた[41]。初期のメンバーと役職は第1表のとおりである。1888年5月に「東京本店詰」となり[42]，その後，大阪支店で働いたものと思われる[43]。

入社の経緯については，藤田組は神戸支店を構えており，牛場が兵庫県勧業課で働いていた時には，既に両者の接点があった可能性もある。また，日本土木会社の支配人には，慶應の後輩である本山彦一が就いており，牛場を誘ったことも考えられる。牛場が日本土木会社に入社することで，山陽鉄道の創設に関わり，後に取締役となる藤田伝三郎との関係が強まったといえる。

当時，日本土木会社は全国各地で様々な建設工事にあたったが，鉄道会社の建設工事も請け負っており，山陽鉄道の工事も担当した。神戸姫路間の建設については，8工区に分けられて進められるが，そのうちの6工区を同社が担当している[44]。

第1表　日本土木会社創設期の要職と担当者

駐在地・職名		氏名
社長兼東京支店長	取締役社長	大倉喜八郎
－	取締役	藤田伝三郎
－	取締役	渋沢栄一
東京駐在	専務取締役	牛場卓三
東京駐在	会計役	伊集院兼吉
大阪支店長	－	久原庄三郎
大阪支店駐在	専務取締役	桑原深造
大阪支店駐在	会計役	木村静幽
技術部	－	山田寅吉

（出典）社史発刊準備委員会編『大成建設社史』大成建設，1963年，68ページ。

39 「大阪朝日新聞」1887年10月27日付。
40 「大阪朝日新聞」1887年7月16日付。
41 社史発行準備委員会編『大成建設社史』大成建設，1963年，68ページ。
42 「神戸又新日報」1888年5月19日付。
43 「伊勢新聞」1892年2月21日付。
44 「大阪日報」1888年5月22日付，同紙，1888年5月23日付。ちなみに第1区は専崎組，第2区は帝国工業であった。

2　ブラシ製造会社の経営

時系列としては衆議院議員に当選するという事実ががある。それについては，次章でみていく。牛場は日本土木会社以外に，もう一つの企業で経営の任に当たっていた。慶應出身者であり，三菱の重役でもあった荘田平五郎は，「鉄道時報」の紙上で山陽鉄道の創設から発展について振り返っているが，その時に牛場について言及している。山陽鉄道に入社する前の牛場の状態について「大阪にブラシ工場を持って」いたと記憶している[45]。この工場というのは，大阪盛業と呼ばれる会社であった。その設立時期は1888年10月であった[46]。牛場をはじめ，生糸輸出で成功した新井領一郎らが，大阪の実業家・松本重太郎らと「国外輸出ノ目的ヲ以テ大阪市ニ盛業会社ヲ組織シ刷子製造業」をはじめた[47]。会社の所在地は「西成郡下福島村」にあり，資本金は10万円であった[48]。

横山源之助のルポタージュである『内地雑居後之日本』を見ると，同社についての記述があり，その経営の様子が確認できる。同書に「此の会社は株式といふと雖も、株主僅かに七人にして寧ろ合資会社と性質近し」と記されている[49]。また，荘田も「名義は会社であったが、実は（牛場－引用者注）先生一人のものと云って宜い…自分で商売をして居られた」と述べている[50]。規模の小さな会社であったことに間違いはない。しかし，「一ヶ月の刷毛産出高八百グロス」という規模で，「関西貿易会社と日本刷毛会社とあれど、産額の多きは此の大阪盛業株式会社なるべし」と言われた[51]。同社で働く職工は日によって変わるが，「四百五十乃至五百」人が働いていたという[52]。1901年に帝国ブラシ株式会社に社名を変更している[53]。新井の経歴をまとめた資料では，1914（大正3）年に同社は解散している[54]。

同社の経営者の異動については，第2表のようになる。表中の佐伯勢一郎，木谷七平は松本重太郎との共同事業が見られ，松本一派といえる者たちである[55]。松本松蔵は大阪で金融業を営む井上保次郎の実弟であり，重太郎の養子となっている[56]。また，松岡勢二

45　「鉄道時報」第348号，1906年5月12日付。
46　由井常彦・浅野俊光編『日本全国諸会社役員録』1，柏書房，1988年，268ページ。
47　「故新井領一郎叙勲ノ件」『叙勲裁可書』昭和14年・叙勲巻3・内国人3。同資料では「盛業会社」の設立時期は1893（明治26）年となっている。
48　由井・浅野，前掲書，232ページ。
49　横山源之助『内地雑居後之日本』岩波書店，2007年，175-176ページ。
50　「鉄道時報」第348号，1906年5月12日付。
51　横山，前掲書，176ページ。
52　同上。
53　由井常彦・浅野俊光編『日本諸会社役員録』5，柏書房，1988年，106ページ。
54　前掲「故新井領一郎叙勲ノ件」。なお，大阪におけるブラシをはじめとする雑貨工業の研究については，沢井実『近代大阪の産業発展　－集積と多様性が育んだもの－』（有斐閣，2013年）がある。同書の第2部を参照されたし。
55　例えば，佐伯勢一郎とは，松本が社長に就いた大阪紡績，南海鉄道の経営に関わり，木谷七平は松本が頭取を務める百三十銀行の取締役に就いている。
56　人事興信所編，前掲書，ま116。松本重太郎には松蔵以外に，松方正義から虎吉という養子をとっている。

第２表　大阪盛業および帝国ブラシの役員の変遷

役職	1894 年 7・8 月	1895 年 5 月	1897 年 1 月	1898 年 1 月
社長	佐伯勢一郎	佐伯勢一郎	佐伯誠一郎	佐伯勢一郎
取締役	松本重太郎	牛場卓蔵	牛場卓蔵	牛場卓蔵
同	牛場卓蔵	松本松蔵	松本松蔵	松本松蔵
監査役	－	松本重太郎	松本重太郎	松岡勢二郎
同	－	新井領一郎	松岡勢二郎	木谷七平
役職	1900 年 1 月	1902 年 1 月	1903 年 1 月	1904 年 1 月
社長	佐伯勢一郎	牛場徹郎	牛場徹郎	牛場徹郎
取締役	牛場卓蔵	牛場卓蔵	牛場卓蔵	牛場卓蔵
同	松本松蔵	松本松蔵	松本松蔵	新井領一郎
監査役	木谷七平	木谷七平	青木喜太郎	青木喜太郎
同	青木喜太郎	青木喜太郎	－	－

注１　役員構成については，連続で示さず，異動のある時期のみを記した。
注２　明治 34 年 1 月は帝国ブラシ㈱に社名変更。
出典：由井常彦・浅野俊光『日本全国諸会社役員録』1，柏書房，1988 年，149 ページ，268 ページ，『同』2，255 ページ，『同』3，81 ページ，『同』4，99 ページ，『同』6，104 ページ，『同』7，105 ページ，『同』9，102 ページ。

郎は松本の元の姓と同じであることから親族と思われる。後半では，牛場卓蔵の実子である徹郎を社長に据えた。1904 年には松本家は役員から外れており，牛場の娘婿である新井が再加入した[57]。松本家の色が抜けて，牛場家のビジネスという流れとなった。

同社の共同事業者として，牛場，新井，松本は繋がっているが，私的な部分ではどうであろうか。牛場卓蔵と新井領一郎の関係であるが，牛場は娘の田鶴（たづ）を新井に嫁がせている。田鶴の孫である松方ハルは『絹と武士』に，「結婚後、娘がアメリカで暮らすというのでなければ、新井とは結婚させない」と記している[58]。牛場は，当時，娘に外国での生活を勧める変わった人物であったと考えられていたであろう。その一方で国際感覚を身に着けており，日本にとらわれず広い視野で構えていたことを示すエピソードであったといえよう。

牛場卓蔵と松本重太郎との関係については，松本重太郎の孫である松本重治が他界した時，牛場卓蔵の孫にあたる牛場友彦が遺稿集に寄稿したが，そこで「松本家と牛場家

57　松本重太郎の関係企業の百三十銀行の破綻が表面化したのは，1904 年 6 月頃である。その前後に関係していた企業の役員を辞任している。松本重太郎の没落については，拙稿「百三十銀行の盛衰」（川口玄編『大阪春秋』第 82 号，1996 年，114-121 ページ），拙稿「松本重太郎と日本紡織株式会社（上）－渋谷紡績所・堂島紡績所時代について－」（長山公一編『同』第 153 号，2014 年，92-95 ページ），拙稿「同（中）－営業概況と経営者・株主の変遷について－」（『同』第 154 号，2014 年，92-95 ページ），拙稿「同（下）－経営破たんとその影響－」（『同』第 155 号，2014 年，90-93 ページ），石井寛治『近代日本金融史序説』（東京大学出版会，19991 年）を参照されたい。
58　ハル・松方・ライシャワー，前掲書，268 ページ。

とは或る程度のつき合いがあった」と記している[59]。これが松本重太郎，牛場卓蔵の代にまで遡るものかどうかは不明であるが，両家の関係は良かったものと思われる。

少し話はそれるが，牛場の交友の範囲についても見ておこう。慶應出身者との繋がりはこれまで見てきたとおりであるが，関西財界での人脈づくりにも積極的であった。例えば，土居通夫，伊庭貞剛，玉手弘通，田中市兵衛，熊谷辰太郎など大阪で活躍していた実業家と「同遊会」なる「倶楽部」の設置計画をたて，進めた[60]。山陽鉄道の役員となる田中市兵衛も同会に加わっていたことは注目に値しよう。大阪においてうまく人間関係を築けていたといえる。その他，郷里で慶応義塾の同窓会を開き[61]，大阪で同郷の人々と集うこともあった[62]。付き合いを大事にし，その土地に馴染むという牛場の姿勢が確認できる。「死ぬまでアンチ大阪であった」といわれた中上川彦次郎との違いといえる[63]。

V　衆議院議員選挙の立候補と政治活動

1　衆議院議員選挙の立候補とその結果

牛場の衆議院議員選挙の様子について一瞥しておこう。牛場は第1回から第3回まで衆議院議員選挙に三重県第1区から立候補している。その選挙結果は第3表のようにまとめられる。第1回衆議院議員選挙は，牛場は落選し，栗原亮一が当選している[64]。選挙直前に，牛場に「納税資格に欠損を生じたり」との疑いが起こった[65]。その疑いについては，「伊勢新聞」に次のように記されている。牛場が購入した白塚村の土地について地価修正の申し出がなされており，その修正額を基準にすると，納税資格から3銭78厘の不足が生じることになったという。この地価修正は前の地主総代から提出されたもので，牛場の知るところではなかった。牛場は取消願いを出し，地租の不足額を納めて事態は収拾した[66]。同紙は「特別広告」として「第一区衆議院議員候補者牛場卓蔵資格ノ義ニ付、虚構ノ風説ヲ流伝スルモノ有之哉ニ候得共、決ノ資格ニ不都合ナク、正確ニ被選挙権ヲ有シ候ニ付、此段選挙者諸彦ニ広告ス」（読点－引用者）と掲載した[67]。疑いは晴れたが，時期的な問題で不利に働き，敗因の一つになったことも考えられる。続く第2回衆議院選挙においては，対立候補である栗原亮一をおさえて議員の椅子を得た[68]。第3

59　国際文化会館『追想松本重治』刊行委員会編『追想　松本重治』国際文化会館，1990年，33ページ。
60　「大阪朝日新聞」1888年3月27日付。
61　「伊勢新聞」1892年2月24日付。
62　「大阪朝日新聞」1887年11月15日付。
63　小林一三『逸翁自叙伝』産業経済新聞社，1953年，50ページ。
64　「伊勢新聞」1890年7月4日付。
65　「伊勢新聞」1890年7月1日付。
66　「伊勢新聞」1890年7月3日付。
67　「伊勢新聞」1890年7月1日付。
68　「伊勢新聞」1892年2月18日付。第2回衆議院議員選挙における三重県第一区の様子については，上野（2008）に詳しい。参照されたし。

第３表　第1-3回衆議院議員総選挙（三重県第１区）

結果	第１回		第２回		第３回	
当選	栗原亮一	1608	牛場卓蔵	1552	栗原亮一	2065
落選	牛場卓蔵	1556	栗原亮一	1431	森川六右衛門	907
	伊東祐賢	9	小河義郎	6	海野謙治郎	10
	尾崎行雄	1	木村誓太郎	3	信藤勘十郎	5
	後藤仁兵衛	1	伊東祐賢	2	牛場卓蔵	4
	川喜田四郎兵衛	1	海野謙次郎	2	川喜田四郎兵衛	1
	－	－	徳井俊作	1	山路丈太郎	1
	－	－	信藤勘十郎	1	笹井祐助	1
	－	－	小林嘉平次	1	三井次郎	1

（注）第１回では８，第２回では11の無効票がでた。
（出典）第１回の結果については，「伊勢新聞」1980年７月４日付，第２回は「同紙」1892年２月18日付，第３回は「同紙」1894年３月24日付。

表からわかるように第１回，第２回の時は栗原亮一と牛場との対決で「接戦」といえる内容と結果であった。第３回目の選挙では，牛場はわずか４票しか得られなかった。誰の目から見ても「惨敗」といえる結果であった[69]。牛場の政治的な立場は基本，「無所属」であり，第２回については「中央交渉部」で記録されているが[70]，強固なまとまりといえるかどうかは不明である。栗原亮一は自由党およびその流れを汲む政党であり，板垣退助とも関係が深かった[71]。第３回で牛場に代わって躍進した森川六右衛門は立憲改進党に所属している[72]。牛場への組織的支援や後ろ盾のなさが不利に働いた感が否めない。この頃には地縁よりも政党への期待が高まっていったのではなかろうか。

2　議員活動と鉄道事業についての発言

第２回衆議院議員選挙当選前後に牛場は鉄道事業に関する発言をしている。ここでそれに注目してみよう。時期的に１度目の「鉄道国有化」が盛り上がり，やがて収まるという頃であった[73]。選挙前に牛場の演説が「伊勢新聞」に掲載されている。「政治上の意見」と題したもので非常に興味深い内容となっている[74]。ここでは牛場の鉄道事業へ思いや考え方がよく表れた部分を中心に見ていくことにする。

69　「伊勢新聞」1893年３月４日付。
70　日本国勢調査会編『衆議院名鑑（第１回・1890年～第34回・1976年総選挙）』国政出版室，1977年，94ページ。
71　同書，100ページ。
72　同書，276ページ
73　明治期に鉄道国有化で盛り上がるのは３回あった。最初のものは1890年の恐慌を背景にするもので，２度目は日清戦争後の恐慌によるものであった。３度目は1904年の日露戦争中に準備されたものであり，この時に国有化が実現する（野田正穂・原田勝正・青木栄一・老川慶喜編『日本の鉄道　成立と展開』日本経済評論社，1980年，101ページ）。
74　「伊勢新聞」1892年２月３日付，付録。

1890年の不況で困難に直面している鉄道業を国家が救済しようする鉄道公債法案、鉄道買収法案に対して「余は甚反対なり」と述べている。この理由については「公債」による鉄道買上げは将来的には良い結果をもたらさないと予測したからである。西南戦争での戦費を不換紙幣に頼った時の弊害を例に出して警告を発している。

そして「譬へば関西鉄道が亀山又は関で止まりて布設することが出来なかりしとしたらんには鉄道の効用は甚だ少なきこと」と述べ，鉄道の「全通」,「貫通」によって大きな効果を得られることを強調した。不完全な状態で放置すると，株価への悪影響もあり，それを抵当にとる銀行も破産するとも言っている。

国家に大きな利害得失が関わることを「俄に議院に持出して協賛を求めたるは大なる誤りなり」と述べ，当時の鉄道政策を批判した。鉄道の国営についての議論は欧米では数十年前から起こっており，ドイツだけが国で鉄道を運営していたが，その利害については判然としていない状態であった。わが国では「第二議会」で初めて議論し始めたばかりで，賛否を求めるのは急ぎすぎており，無理なことを進めていると指摘するのである。

さらに，わが国の鉄道業は最初国が建設し，やがて私設鉄道の設立を認め，その後，鉄道払い下げの議論が飛び出し，今回また国有化の法律を制定しようとしており，頻繁に運営方針，主体をかえようとする国家の節操のなさを批判している。

牛場が衆議院議員に就任してからは，山陽鉄道の創設期のメンバーで常議員であった石田貫之助と意見を異にすることがあった。石田貫之助は山陽鉄道では中上川彦次郎の経営に批判的な態度をとる人物のひとりで，社内の改革をしようとした[75]。また，1891年12月24日に私設鉄道買収法案をつぶした人物でもあった。そのことで山陽鉄道の役員を辞めている[76]。

第3帝国議会で再提出された鉄道公債法案，私設鉄道買収法案が第1読会を通過した。1892年6月6日，鉄道公債法案の第2読会で石田はここでも鉄道の国有化に反対して，私設鉄道買収を規定した条文（第3章第11条・第12条・第13条）の削除を求めた[77]。これに対して牛場卓蔵は「私ニハ解セナイ御意見ト考ヘル」と述べ，国が「私設鉄道ヲ其儘捨テ置イテ先キヲ段々延長スルト云ヘバ大変ナ不経済ニ違ヒナイ」といい，事業体統一の重要性を強調した[78]。石田は終始国有化に反対するが，牛場は時と場合によ

75　中上川彦次郎と関西系株主・経営者との衝突については，拙稿「山陽鉄道会社における中上川彦次郎の経営姿勢と社内改革」（交通史研究会編『交通史研究』第39号，1997年，56-69ページ）を参照されたし。

76　拙稿「山陽鉄道における広島乗り入れの資金調達について」（川口玄編『大阪春秋』第97号，大阪春秋社，1999年，64-72ページ）において，山陽鉄道の株主から石田排斥の動きがあり，検査役を辞任したことに触れている。

77　東京大学出版会『帝国議会衆議院議事速記録』4，東京大学出版会，1979年，430ページ。

78　同書，435ページ。

っては，国有化への移行を認めていたのである。

その後，牛場は「政治よりも企業活動を好み、議員は一期でやめた」といわれる[79]。議員活動に終止符を打ち，山陽鉄道に入社するのである。1894 年 4 月 21 日に開かれた株主総会で総支配人に就任し[80]，以降，1907 年の鉄道国有化まで同社の切り盛りを行い，サービス優良企業として発展させていくのであった。

Ⅵ　おわりに

牛場卓蔵についての文献については一長一短あるが，その長所をつなげ，また，今まであまり使われない資料を用いて半生を描いた。牛場は言論界，地方官，国家官吏，企業経営者，衆議院議員など様々な分野，場所で活躍した。一つの職を辞めても次の職に就けており，ほとんど「空白期間」がなかったといえる。慶應義塾の人脈は広く，絆も非常に強かったことで，それができたといえる。当時，いかに慶應義塾の卒業生が各方面で活躍したかがわかる。

また，牛場卓蔵は山陽鉄道に入社する前から，関西の実業家で同社の重役である藤田伝三郎，松本重太郎，田中市兵衛と良好な関係にあった。藤田伝三郎，大倉喜八郎が中心となって経営する日本土木会社に入社し，松本重太郎とは大阪盛業という雑貨工業の会社で共同事業を行い，既に人間関係を築けていた。それ以外に牛場家，松本家の私的なつながりも確認できた。関西の財界でも交友関係を広めようと積極的に動いていた。こうした点は，終生「大阪アレルギー」の中上川彦次郎とは違い，山陽鉄道で長期政権を築けた理由の一つとして挙げられよう。さらに，入社前に，中上川の経営に批判的で，議員時代から鉄道事業に対して意見の合わない石田貫之助が山陽鉄道を去っていたことも大きな意味があった。こじれたり，衝突したりする危険性はなくなっており，社内での人間関係の安定化に繋げられたと考えられよう。

牛場卓蔵の衆議院議員選挙の演説，議会での発言から，公債発行による鉄道買収への慎重な姿勢が確認できた。そして鉄道の全通・貫通による効果を強調し，国であれ，私設鉄道であれ，鉄道事業の一本化を勧めた。こうした鉄道事業に対する考え方はその後変化するのであろうか。また，国有化実現前に展開した「私設鉄道利益配当制限論」と関係しているのか。それらのことを明らかにするのは，次稿以降の課題としておく。

79　ハル・松方・ライシャワー，前掲書，269 ページ。
80　「伊勢新聞」1891 年 4 月 24 日付。